



【農業列島】 産地ルポ

トマト

熊本県 JA熊本うき

「桃太郎」シリーズで 味重視へシフトチェンジ 競争力を高める取り組み

(編集部)



↑トマト専門部会役員でもある石田さん。今年から9月定植の長期作を「桃太郎ホープ」に切り替えた。

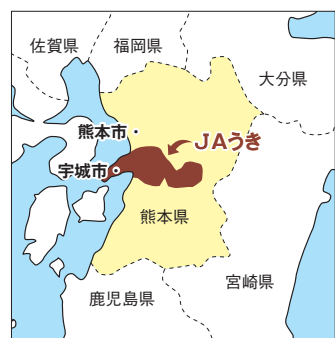
産地を上げておいしい 「桃太郎」の栽培に取り組み

熊本県は全国でも有数のトマトの主力産地。なかでもJA熊本うきは、大産地である八代地区や玉名地区に挟まれた中規模産地です。

県内他産地では、「桃太郎」から一部品種を切り替えるなど、おいしさから作りやすさにシフトする流れがあるなかで、JA熊本うきでは、食味を武器に産地としての差別化を図るため2018年産より「桃太郎」系品種の全面導入に取り組みられています。

2018年産は抑制作に「桃太郎ピース」・促成作は「桃太郎ホープ」を導入、半促成作では同作より「桃太郎ネクスト」の試作を開始しました。作型別で品種統一を図ることで、着色、食味のばらつきをなくし品質重視への出荷へと切り替えを始めています。

「大産地に対抗するためには、おいしさを無視した生産では生き残れない。



作りやすい品種ではないが、タキイさんの協力も得て作りこなしていきたい」
JA熊本うきトマト専門部会の廻田誠部会長を中心に、産地の栽培技術の底上げに精力的に取り組みまれているのです。

定植の大玉トマトをすべて 「桃太郎ホープ」へ

次は生産者の声をお聞きしました。

お伺いしたのはトマト専門部会の役員のおひとり石田真一さん(36歳)の90mハウスです。石田さんは部会の方針に合わせて、今年から9月20日ごろ定植の大玉トマトをすべて「桃太郎ホープ」へ切り替えられました。熊本県内では日本を代表するトマト産地が数あります。中堅産地のうきとしては、食味を武器にしなければ市場の引き取りもなくなるという危機感があったそうです。

冬場に収量上がる前年までの品種と比較すると、「ホープ」は低温で伸びる力はあるものの7段目あたりの花芽



↑約140 aのハウスを経営する石田さん。



↑「桃太郎ホープ」の秀品率は高いと評価。↑ベトナムからの研修生4名が収穫に入る。皆さま真面目で仕事もていねいだとか。



↑節間は「桃太郎ピース」より長いと石田さん。

量販店との
取り組み

JA熊本うきの「桃太郎トマト」が 関西スーパー中央店で試食販売

2019年4月6日に、兵庫県伊丹市の関西スーパー中央店で、JA熊本うきの「桃太郎トマト」の試食販売が行われました。産地の女性生産者2名がマネキンさんとして売り場に立ち、宇城のおいしい「桃太郎トマト」をPR。売り場には子どもからお年寄りまで老若男女が立ち寄り、大盛況でした。

株式会社関西スーパーマーケットは、大阪・兵庫・奈良に65店舗展開する関西の老舗量販店。同社ではトマトの品ぞろえに力を入れるなかで、大玉トマトに注目。「おいしいトマトは「桃太郎」との観点から、全店で「桃太郎トマト」を扱うことを目標に、全国の「桃太郎」産地からトマトを仕入れ周年販売できる体制づくりを始められました。そのなかで、仲卸である大阪中央青果(株)さんから紹介されたのが、JA熊本うきです。

「『桃太郎』はパイヤーが自信をもっておすすめできるトマト。産地も各地にあり、年間リレーでお届けできるのもよいですね」と同社のパイヤーからも好評の「桃太郎トマト」。関西スーパーでは今後も「桃太郎」を扱うことで、他企業との差別化を図っていきます。

JA熊本うきとしても、販売店舗として「桃太郎」の価値を理解してくれる関西スーパーと今後とも取り組みを行いたい考えです。

「おいしいトマトはくまもとと宇城産」を合言葉に生産に取り組むJA熊本うき。全国の消費者に「おいしい桃太郎トマト」を届けるため、産地の挑戦はこれからも続いていきます。



← 右からJA熊本うき 営農販売部園芸販売課 亀井係長、トマト 専門部会 廻田部会長と、試食販売に立たれた生産者 平田さんと 欽田さん。関西スーパー中央店 矢野店長、菅崎青果チーフと共に。



← 兵庫県伊丹市に本社を構える株式会社関西スーパーマーケット(写真は中央店)。

がとんでしままい小玉傾向だったそうです。その分春先は回復してきたためトータルは収量は変わらないということでした。

「桃太郎」の食味のよさで市場へアピール

「今年はお荷のどぶつきでトマトの価格が全体に低迷するなか、他産地と比べたら価格的にも善戦したと思います」と、春先はまずまずの成績だったようです。

長期の大玉からミニトマト、メロンにつなげていくという石田さん。元来、春のメロンが終わればその施設でトマトを栽培するという地域。春のメロン

の価格がよいなかでも、トマトを一定以上は続けたい理由は、「研修生を入れた場合、彼らに周年で仕事があるとこの意味ではトマトがどうしても欠かせない」と、言うのです。

現在、約140aのハウスを営営する石田さんの労働力は、家族2人と研修生4人の計6人でまわされています。研修生の確保は欠かせません。そういう意味でもトマトの安定した栽培と品質、価格の安定が求められているのです。8月定植の抑制作は「桃太郎ピース」主体。9月定植の長期作から「桃太郎ホープ」を導入して、栽培をつないで行きます。「桃太郎」の食味のよさ

で市場での存在感を図っていく部会のも

思いを聞かせていただきました。石田さんと同じように30〜40歳代のインターン生産者が増えるこの地域で、トマト黄化葉巻病の耐病性を持ちつつ食味と収量を両立した品種が今後も求められています。

中堅といっても90名からの部会員を誇るJA熊本うきさんですが、石田さんのような若手生産者も多く、栽培技術の向上に部会全体でも自信を持たれています。「以前よりは地域全体のトマト栽培のレベルが上がってきていると思います」と味や品質レベルを引き上げ、売り先を絞られることなく市場から求められるトマトづくりに再び舵を切ったところからです。